

子どもの心に向き合う道徳の授業づくり

— 道徳の授業は「出会い」で決まる —

Production of a lesson of the morality which faces the children's heart

The lesson of morality is oriented by "encounter" with data or value

次世代教育学部（非常勤）

増井 眞樹

MASUI, Maki

Faculty of Education for Future Generations

(part-time lecturer)

キーワード：資料との「出会い」、価値との「出会い」、判断との「出会い」、コールバーグの道徳的発達段階

要旨：道徳の授業づくりの要件は、子どもと資料・価値・道徳的判断との出会いとその方法が重要である。資料は、①感動を覚えるもの②人間の弱さに向き合うもの③生死の問題④日常生活を振り返るもの⑤葛藤があるものに視点を当てて選ぶ。価値については、出合わせる価値を明確にし、発達段階・背景を知り、実態に向き合って、子どもに出合わせる。道徳的判断については、コールバーグの道徳的発達段階に基づき、どの段階まで、子どもに考えさせたいかを明らかにして出合わせる。

1. はじめに

授業者は常に、1時間の授業の中で、子どもにどんな力をつけたいのか、学ばせたいのか、考えさせたいのかを明らかにして授業に臨む。そして、その手立てを講じるために資料や教具を準備している。それらの資料や教具と子どもとの出会いが授業では重要なのである。

授業者にとって、教科の授業における「出会い」は特に大切にされている。教科の指導内容の理解を深めるだけでなく、興味関心意欲を高めることができるからである。そして、ものの見方考え方が広がり醸成することが期待できるからである。

小学校第3学年社会科「昔の暮らし」では、授業者は毎時間「きょうは、何を子どもに出合わせようか」と胸を躍らせながら授業の準備をする。藁で編んだ「おひつ入れ」を見せ、炊飯器もジャーも無かった時代の人々の知恵を子どもたちに気づかせていく。家事を楽にさせるために、どのように考えられてきたのかは、鹽と洗濯板の時代から手回しドラム・絞り器つき洗濯機・二層式洗濯機・全自動洗濯機・ドラム式洗濯機までの変遷を具体的に提示すれば、子どもの思考は

驚きをもって深まっていく。算数では、1立方メートルの大きさを実際に作って、実感させる。理科では、実験や観察の上に、当たり前と思っていることを砕く事象を提示したり、「何だろう」「不思議だな」と思う現象に出合わせたりする。

教科の授業における「出会い」と同じように道徳の授業における「出会い」も重要であり、授業者が仕組んでいかなければならないと考えている。

2. 資料との「出会い」

道徳の時間の年間指導計画に、毎時間の資料が挙げられている。その資料はどのように選定されるのか。

小学校学習指導要領解説 道徳編には、下記のように掲載されている。

（「第3章 道徳」の「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の1）

(2) 道徳の時間の年間指導計画の作成に当たっては、道徳教育の全体計画に基づき、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動との

関連を考慮しながら、計画的、発展的に授業がなされるよう工夫すること。その際、第2に示す各学年ごとの内容項目について、児童や学校の実態に応じ、2学年間を見通した重点的な指導や内容項目間の関連を密にした指導を行うよう工夫すること。ただし、第2に示す各学年段階ごとの内容項目は、相当する各学年においてすべて取り上げること。なお、特に必要な場合には、他の学年段階の内容項目を加えることができること。

そして、年間指導計画の意義を述べる際に、「道徳の時間の主題は、指導を行うに当たって、何をねらいとし、どのように資料を活用するかを構想する指導のまとまりを示すものであり、『ねらい』とそれを達成するための『資料』によって構成される。」とある。

つまり、資料はねらいを達成するために必要で重要なものであること。しかも、各学年段階ごとの内容項目は、相当する各学年においてすべて取り上げることとなっている。

ここで、A小学校で実際に年間指導計画を作成する際の手順を挙げながら、資料との出会いについて述べる。

年度初めに、子どもを目の前にして、検討するものとしているが、実際には、年度初めの多忙の中では十分な検討ができない。そこで、前年度末にその年度の子どもたちの実態と照らし合わせて作成する。平成20年度までの年間指導計画作成の留意点は以下の点であった。

- ①学習指導要領に基づく。
- ②教育委員会の指導の方針に沿って考える。
- ③子どもの実態・保護者の願い・地域の実態を考慮する。
- ④発達の段階に応じて指導内容の重点化を考慮する。
- ⑤年間35時間実施する。
- ⑥教育活動全体とのかかわりを考慮する。
(総合的な学習の時間・学校行事)
- ⑦多様な指導方法を工夫する。
(役割演技・体験活動の活用・話し合い活動)
- ⑧多彩な資料・補助資料等を確保する。
(紙芝居・OA機器・地域講師の参画など)
(心のノート・兵庫県副読本など)

その上で、平成20年8月に、平成21年度から実施の学習指導要領に合わせて、学習指導要領の改訂の特徴と内容の取扱いを検討した。

<改訂の特徴>

- ①「生きる力」は継続
- ②規範意識を高める
- ③生命尊重を重視
- ④働く意欲を喚起する
- ⑤情報モラルを指導

<内容の取扱い>

- 校長・教頭の参加、道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実する。
- 宿泊・自然・ボランティアなどの体験活動を推進する。
- 先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなど児童生徒が感動する魅力的な教材を充実する。
- 自分の考えを基に、書いたり話し合ったりするなどの表現の機会を充実し、自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感できるよう工夫する。
- 情報モラルに関する指導を行う。

さらに、「いじめ」「不登校」「学級崩壊」「虐待」「問題行動」等、児童を取り巻く現況と課題を見据え、配慮を要する児童への対応を考慮しながら、A小学校では、「生命尊重」と「思いやり」「規範意識」を重点的に指導する価値と決めた。

資料選定の要件として、人間尊重の精神にかなうもの、ねらい達成に適しているもの、児童の興味関心や発達段階に応じたもの、多様な価値観を引き出すもの、中立的なもの他に、小学校学習指導要領解説道徳編では、次の6点を挙げている。

- ア 児童の感性に訴え、感動を覚えるようなもの
 - イ 人間の弱さやもろさに向き合い、生きる喜びや勇気を与えられるもの
 - ウ 生や死の問題、先人が残した生き方の知恵など人間としてよりよく生きることの意味を深く考えさせられるもの
 - エ 体験活動や日常生活等を振り返り、道徳的価値の意義や大切さを考えることができるもの
 - オ 悩みや葛藤などの心の揺れ、人間関係の理解等の課題について深く考えることができるもの
 - カ 多様で発展的な学習活動を可能にするもの
- この中でも特に、感動を覚えるもの、人間の弱さに向き合うもの、生死の問題、日常生活を振り返るもの、葛藤があるものを選び、次の9資料を決めた。

○生命尊重

- 第1学年 「あったかいね」
- 第3学年 「大切なものはなんですか」

- 第5学年 「生きる力をありがとう」
- 思いやり
 - 第1学年 「はしのうえのおおかみ」
 - 第4学年 「おばあちゃんの指定席」
 - 第5学年 「手品師」
- 規範意識
 - 第1学年 「かぼちゃのつる」
 - 第3学年 「水飲み場」
 - 第5学年 「これもチェーンメール」

「この学年の子どもは感動するだろうか」「この学年の子どもにとっては難しいだろうか」「誰が、どんな反応を示すだろうか」と授業者が実際の子どもの反応を想像しながら選定していった。感動を覚える資料は、その作品を読むだけで、児童が感動を覚えるもので、どの資料にも当てはまる。そして、何より授業者自身が感動する資料を選定していったのである。資料の特徴を図1に示した。

	①	②	③	④	⑤
あったかいね	○		○	△	
大切なものはなんですか	○	△	○	○	○
生きる力をありがとう	○	○	○		○
はしのうえのおおかみ	○	○		○	○
おばあちゃんの指定席	○	○		○	○
手品師	○	○			○
かぼちゃのつる	○	○		○	
水飲み場	○	○		○	○
これもチェーンメール	○	○		○	○

図1

- ① 感動を覚えるもの
- ② 人間の弱さに向き合うもの
- ③ 生死の問題
- ④ 日常生活を振り返るもの
- ⑤ 葛藤があるもの
- は当てはまる。 △は当てはまることもある。
- ①～⑤の要件のうち、できるだけ多くの要件を含んだ資料が、子どもに出合わせるものとして適切である。

3. 価値との「出会い」

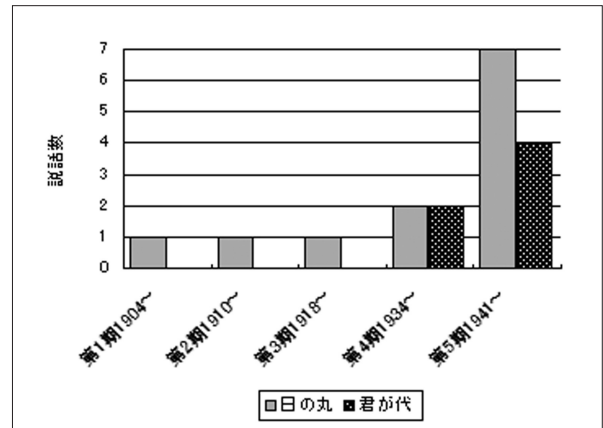
価値の多様化、個人主義、自由の尊重などという言葉があふれ、保護者の考え方も様々である。

また、学校現場には、価値の押しつけは間違っているという考え方もある。この考え方は、かつての修身の指導や、軍国主義の時代に教育の方向が偏向していったことを危惧する考えから来ているものと考えられる。

実際、表1に示すように、修身教科書における「日の丸」や「君が代」に関する説話は、第4期、第5期に増している。そして、それらの説話数の約半数が海

外での戦争遂行に絡めて語られるというように、質的にも変化をとげ、海外での戦争を遂行するための修身教育として実行されたことを示唆しているのである。

表1 修身教科書における日の丸・君が代の説話数



外でこのことがあまりにも強烈に多くの教師の心に浸透していったからだろうか。道徳の時間は実施されても授業者によって取り扱われる価値に偏りが見られることがあった。

しかし、日本は、戦後、民主主義の考え方が道徳教育のよりどころとなっている。

小学校学習指導要領昭和33年改訂の道徳教育における「目標」と「指導計画作成および指導上の留意事項」においては、「人間尊重の精神、個性豊かな文化の創造、民主的な国家および社会の発展、平和的な国際社会に貢献できる日本人を育成、児童に関する資料の収集整理、家庭・地域社会と連絡、生活・時事問題も取り入れ指導計画を弾力的に、児童の自主性を尊重、話し合い、説話、読み物、視聴覚、劇、実践活動、発達段階、個人差に応じた指導、評定はしない」という文言が並んでいる。50年後の学習指導要領と大差ないのである。社会情勢や経済状況、児童を取り巻く環境に変化があるものの、50年間基本方針は変わらずに受け継がれてきたのである。

そして、現行の小学校学習指導要領 第1章 総則 第1 教育課程編成の一般方針 2には、「道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心もち、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図るとともに、公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努め、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来

を拓く主体性のある日本人を育成するため、その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。」とある。

このことから、「指導計画の作成と内容の取扱い」通りの実践の重要性を認識し、内容項目の価値をすべて取り上げる意義が納得できる。そして、A小学校の場合であれば、「生命尊重」と「思いやり」「規範意識」を学校教育活動全体と関係づけて、道徳の時間には、複数回実践するのである。

では、「生命尊重」の価値をどのように子どもに出合わせるのか。第3学年の「大切なものはなんですか」の実践から考えてみる。

【内容項目】生命の尊さを知り、生命のあるものを大切にする。

【展開の概要】

発問「みなさんの大切なものはなんですか。」

児童「ゲーム、おもちゃ、飼っているペット、昆虫」

発問「このお話では、大切なものは何だと言っていますか。」

児童「コガネムシはお金」「アリは食べ物」「カブトムシは体」「カタツムリは自分の家」「トンボは勉強」「アゲハチョウはもっと大切なもの」

発問「アゲハチョウが考えたもっと大切なものは何ですか。」

児童「命・生きていること」

【授業の実際】

発問「みなさんの大切なものはなんですか。」

児童「家族、命、水」

発問「なぜですか」

児童「ないと困る」

発問「みなさんが考えたことと、アゲハチョウが思ったことは同じでしたね。これからも命を大切にしましょう。」

極端な例だが、道徳の時間ということで、子どもは構えてしまう。授業者も「命を大切にしよう」ということしか考えていなかった資料分析の浅さを痛感したのである。

【改善案】

発問「一番大切なものは何ですか？理由も言ってみよう。」

児童「家族。わけは、ないと困るからです。」

「なくなったら戻らないから、命です。」

「水です。無いと、生きていけないからです。」

「お金です。無いと、物が買えないからです。」

発問「大切っていうから、どんなに大切にしていますか？」

児童「家族を大切というのは、助けたりすることです。」「お手伝いをしたりしている。」「風邪をひいたら、ごはんを作っている。」「いやなことがあったら、話を聞いてくれる。」

「命を大切にするって…けがをしない・人をけらさない」

「水を大切にするって…無駄遣いしない、よごさない」

「お金を大切にするって…ものを大事にする」

発問「みんなは、大切とっているけれど、ほんとは大切じゃないでしょう。みんなのしていることを見たら大切にしているように見えないけれど。」

発問「アゲハチョウが考えたもっと大切なものは何ですか？」「モンシロチョウのお母さんはなぜ、いつまでもいつまでも飛んでいたのでしょうか。」

児童「命・生きていること」

「モンシロチョウのお母さんの気持ちを考えたら、命の大切さがわかる」

「なくなったら、もう会えない。何もできない。」

「お母さんの愛情がこめられている。」

「なくなったら、家族が悲しむ・さびしがる。」

「次の命が生まれない・続かない。」

発問「セミは何を考えたでしょう。」

児童「セミ（私）は、長い間土の中において、外に出ても2～3日で死んでしまう。命なんてすぐになくなるから、大切かどうかわからなかったが、モンシロチョウのお母さんのようすを聞くと、大切にしなければいけないと思った。」

「セミ（私）は、命が大切と思っていたけれど、本当は大切にしていなくて、アゲハチョウの話から考えて、命を本当に大切にしようと思いました。命がなくなるとモンシロチョウのようにいつまでもお母さんがかなしむからです。命がなくなると、さびしくなるし、次の命へ続かないからです。」

ここでの、価値との出会いは、「みんなは、大切と言っているけれど、本当は大切じゃないでしょう。みんなのしていることを見たら大切とは思えないけれど。」と切り返すことで子どもは気づかされるのである。「大切」「大切」と口では言うけれど、行動が伴っていない現実を目を向けさせる。

また、命の大切さについては、元に戻らないというだけでなく、次の命が生まれない、続かないという考えに出合わせ、命の意味にも気付かせることが大切。

子どもの意見として、出させることが一番だが、無理ならば、「こんな考え方をした人もいるのよ」「先生はこう思うのよ」と紹介する方法もある。

この実践から、価値との出合わせ方のポイントとして、次の3点が明らかになった。

- ①子どもに出合わせたい価値・考え方を明らかにしておく。
- ②価値に関する子どもの状況を知る。(発達段階・背景)
- ③授業の中で子どもの実態に向き合わせる場面を考える。(繰り返し)

4. 道徳的判断との「出会い」

道徳の授業参観をすると、展開の中で、子どもが自分の考えを述べる場面がある。多くの授業の場合、学習集団によって構成される考えを、授業者がまとめるという光景を見かける。授業者がこの判断・考え方を子どもに出合わせようというねらいが見られないことがある。授業者自身、「押し付け」はいけないと考えて最初から学習集団に委ねることもあるようだ。

子どもに様々な意見を出させ、「いろんな意見がありますね」で終わってしまう授業があるが、それでは不十分である。

指導すべき「内容項目」が学習指導要領に明示されている以上、価値につながる判断や考え方を押し付けではなく、指導する必要があると考える。

第4学年「おばあちゃんの指定席」の資料を通した「思いやり」の価値の授業実践から道徳的判断との出会いについて考える。

【内容項目】相手のことを思いやり、進んで親切にする。

【展開の概要】

発問「ゆう子はどうして『今日も、おばあちゃんに会えるかな…』と思っているのだろう。」

児童「席を譲れて気持ちがいい。」「仲良くなれて嬉しい。」「おばあちゃんが喜んでくれる顔が見たい。」

発問「ゆう子はおじさんに席を譲ったでしょうか。」

児童（譲る）

- 「足を怪我した人の方が優先だと思うから」
- 「おばあちゃんもわかってくれると思うから」（譲らない）
- 「おばあちゃんが悲しむから」
- 「おばあちゃんのことを裏切る気がするから」

上記の児童の発言は、指導案の「予想される児童の発言」に記述されている。教材研究の結果、児童の発言を予想したのである。しかし、その予想は児童の発言の域を超えない場合が多い。

コールバーグの道徳的判断の基準に基づけば、ここまでは考えさせたい、或いは気づかせたい考え・判断や、予想される発言をもれなく挙げるができる。表2は、発問「ゆう子はおじさんに席を譲ったでしょうか。」に対する予想される児童の発言である。

表2 *ゆう子はおじさんに席を譲ったでしょうか。

	席を譲る	席を譲らない
罰回避	<ul style="list-style-type: none"> ・おばあちゃんもわかってくれる ・おじさんがかわいそう ・まわりの人から冷たい目で見られる 	<ul style="list-style-type: none"> ・おばあちゃんに「約束を破った」と言われるから ・おばあちゃんが悲しむ ・おばあちゃんに叱られる ・おばあちゃんが立ってしまうことになるので、譲れない
Give and take	<ul style="list-style-type: none"> ・おじさんが喜んでくれるから ・足を怪我した人が優先 ・足を怪我した人のほうが大変だから ・譲らなかつたら後悔する ・おじさんが嫌な気持ちになる 	<ul style="list-style-type: none"> ・おばあちゃんの悲しむ顔を見たくないから（おばあちゃんに喜んでもらいたい） ・おばあちゃんを裏切る気がする ・約束を守りたい
よい子	<ul style="list-style-type: none"> ・まわりの人が譲るべきと考えるから ・おばあちゃんにかわれるくらいなら、おじさんにもかわるだろう ・まわりの人にほめられる ・困っている人に席を譲るのが正しいと社会の人は思っている 	<ul style="list-style-type: none"> ・まわりみんなに、おばあちゃんに席を譲ることがわかってもらえるから
法律順守	<ul style="list-style-type: none"> ・体の不自由な人に席を代わるように車内に書いてあるから ・おじさんに席を譲ったことをおばあちゃんは喜んでくれるから 	<ul style="list-style-type: none"> ・おばあちゃんとの約束が大事だから ・おばあちゃんとの約束をまわりの人が理解してくれる ・高齢者に席を譲ろうとしていることをわかってもらえる

【コールバーグの道徳的判断基準】

第1段階

懲罰と服従の段階…罰回避

第2段階

個人的道具的目的と交換の段階…Give and take

第3段階

共同の間 人格的期待、関係、同調の段階…よい子

第4段階

社会システムと良心の保持の段階…法律順守

その上で、コールバーグの道徳的判断基準の第3段階（よい子）の考えまでは、気付かせたいというねらいを設定するのである。そして、それに近い考えの子どもに発言を求めたり、授業者の説話の中に盛り込んだりして、めあてとする道徳的判断に出合わせるのである。

指導案には、コールバーグの道徳的判断基準の下位のものから挙げ、子どもの意見の発表の順番にも留意したい。そのためには、授業者の頭の中では道徳的判断基準の下位から順に整理されていなければならない。そして、何より、この考えを子どもに出合わせたいと考える授業者の姿勢が必要なのである。

また、意見を述べる際には、理由を付することを習慣づけさせる。「発話は、一連の『理由』に基づいている」というハーバーマスのコミュニケーション理論にあるように、子どもの意見もそれぞれの「理由」で裏付けされている。ただ、子どもは、自分自身で自覚していなかったり、適切な言語表現ができなかったりする場合がある。そのところを具体的にするのが授業者の仕事である。また、日頃から、「理由」を吟味する児童を育てておく必要がある。

5. おわりに

資料や価値との「出会い」の積み重ねが、子どもにとっては学びであり成長につながる。時には子どもの人生を左右することもある。年間指導計画に記載されているからとか、副読本にあるからという理由で授業をするというのではなく、この子どもたちにこの資料をこの価値をこんな風に出合わせ、こんな力を付けたいということを明確にして授業実践する必要がある。そのためには、子ども理解と資料分析が何よりも重要なのである。

6. 文献

- 1 茶藪克己（1999）『『大切なものはなんですか』 どうとく きみがいちばんひかるとき 3年』 光村図書
- 2 永田繁雄（2000）「おばあちゃんの指定席」 文部科学省資料
- 3 宮坂宥洪監修 解題、渡辺昇一序（2000）、『『修身』全資料集成』、四季社
- 4 文部省調査局（1958）小学校学習指導要領 昭和33年改訂「文部時報別冊」
- 5 文部科学省（2008）小学校学習指導要領 東京書籍株式会社 p13, p105, p106
- 6 文部科学省（2008）小学校学習指導要領 解説 道徳編 東洋館 p69, p93, p94
- 7 ユルゲン・ハーバーマス著、三島憲一、中野敏男、木前利秋訳（2000）「道徳意識とコミュニケーション行為」 岩波書店